

## 阮籍と山濤

鷹橋 明久

はじめに

魏・晋の際は、反体制的な言動をとる名士が次々と粛清されてゆく波乱の時代であった。そのような時、阮籍にも疑惑の眼が向けられていたが、不思議と彼は生を全うすることができた。嵇康など多くの名士が殺されていくなかにあつて、なぜ阮籍だけは無事に生き延びることができたのか。このたびは、この問題について考えてみたいと思う。

一

阮籍が始めて官位に就いたのは、正始三年（二四二）、三十三歳の時である。太尉になったばかりの蔣濟の掾として召されたのである。これは強要されての出仕であり、阮籍はすぐに病を理由に田舎に帰ってしまう。その後、正始四年（二四三）と正始八年（二四七）にも、それぞれ尚書郎、曹爽の参軍になつてはいるが、いずれも病と称

して官を辞している。阮籍は、十四、五歳の頃には、『書』や『詩』などの儒教の經典を学び、顔淵や閔子騫のような人物に憧れ（「詠懷詩」——其十四）、儒家の教えに則つた理想的政治を行いたいと願つていたようであるが、この頃には完全にそうした意志は失われ、儒教とは対極にある老莊思想に没頭していったようである。しかし、このような生活は長くは続かなかつた。嘉平の政変で曹爽の権力が壊滅すると、阮籍は司馬懿に召されてその従事中心となる（二四九）ことを余儀なくされる。これは、血まみれの権力闘争劇のほんの幕開けにすぎなかつた。その後、阮籍は司馬師の大司馬従事中心（二五二）、関内侯、散騎常侍（二五四）、東平太守（二五七？）、司馬昭の従事中心（二五八？）、歩兵校尉（二六〇？）を歴任し、司馬懿、その子の司馬師、司馬昭の陰謀の渦に否応なしに巻き込まれてゆくのである。

司馬氏の魏王朝篡奪の経過について劉大傑氏は次のように述べている。

正始是魏廢帝的年号。当日的政治実権已落在司馬懿

父子の手裏。魏帝闇弱，篡奪之勢已成，封建統治階級内部的矛盾与闘争，非常尖鋭而残酷。司馬懿於嘉平元年，誅曹爽，司馬師於嘉平六年廢齊王芳，司馬昭於景元元年弑高貴鄉公。他們一面剪除宗室，奪取政權，同時又排除異己，屠殺文士。曹爽被誅，何晏、李勝、丁謐、鄧颺、畢軌、桓範等同日斬戮，有「名士減半」之歎。夏侯玄、李豐當時重望負，持操很高，因對政治不滿，為司馬師所殺。至於嵇康之死，尤近於腹謗。這種黑暗恐怖的政治環境，一面促進玄學的發展，同時對於文學也起了很大影響。

正始は是れ魏の廢帝の年号なり。当日の政治実権は已に落ちて司馬懿父子の手裏に在り。魏帝は闇弱にして、篡奪の勢は已に成り，封建統治階級内部的の矛盾と闘争は、非常に尖鋭にして残酷なり。司馬懿は嘉平元年に、曹爽を誅し，司馬師は嘉平六年に齊王芳を廢し，司馬昭は景元元年に高貴郷公を弑す。他們は一面で宗室を剪除し、政權を奪取し、同時に又た己に異なるを排除し、文士を屠殺す。曹爽は誅せられ、何晏、李勝、丁謐、鄧颺、畢軌、桓範等は、同日に斬戮せられ、「名士減半」の歎き有り。夏侯玄、李豐は當時の重望を負ひ、操を持すること很だ高きも、政治に対する不満に因りて、司馬師の為に殺さる。嵇康の死に至りては、尤も腹謗に近し。この種の黑暗恐怖の政治環境は、一面に玄學の發展を促進し、同時に文學に対しても也た很だ大なる影響を起こせり。

司馬氏の篡奪に異を唱えたり、政治への不滿を口にする名士たちは、このように次々と誅殺されていった。さらに、『世説新語』尤悔篇には、

王導、温嶠俱見明帝。帝問温前世所以得天下之由、温未答。頃王曰、温嶠年少未諳、臣為陛下陳之。王迺具叙宣王創業之始、誅夷名族、寵樹同己、及文王之末、高貴郷公事。明帝聞之、覆面箬牀曰、若如公言、祚安得長。

王導、温嶠俱に明帝に見ゆ。帝温に前の世に天下を得し所以の由を問ふも、温未だ答へず。頃ありて王曰く、温嶠は年少くして未だ諳らず、臣陛下の為に之を陳べん。王は迺ち具に宣王の創業の始め、名族を誅夷して、己に同じきを寵樹し、文王の末に及び、高貴郷公の事を叙ぶ。明帝之を聞き、面を覆ひ牀に箬きて曰く、若し公の言の如くんば、祚は安んぞ長きを得ん、と。

西晉王朝成立の経緯を聞いて衝撃を受ける東晉・明帝の様子をリアルに記しており、ここからも司馬氏の篡奪劇の凄まじさが伺える。

このような司馬氏一族の悪辣なやり方を目の当たりにして、阮籍の心は大いに揺さぶられる。司馬氏への怒りは、用意周到に自らの真意をはぐらかしてはいるものの、阮籍の作品から充分に窺い知ることができるのである。

值狂犬之暴怒、加楚害于微軀。欲残没以麤滅、遂捐棄而淪胥。嗟薄賤之可悼、豈有忘于須臾。

狂犬の暴にはかに怒るに値あひ、楚害を微軀にはかに加えられる。残没して以て麩滅びひせんと欲し、遂に捐棄えんして淪胥あす。嗟、薄賤の悼いたむ可いき、豈に須臾も忘るること有らんや。これは、阮籍が嘉平年間（二四九—二五四）に作成したとされる「鳩賦」の一節であるが、飼つていた二羽の小鳩が狂犬に食いちぎられる様子を伝えており、これまで多くの人が指摘しているように、嘉平元年に起きた政変、あるいはその後の一連の事件における司馬氏の非道なやり方を非難したものである。

更に、「詠懷詩」其十六、

徘徊蓬池上	蓬池の上りを徘徊し
還顧望大梁	還顧 <small>かへりみ</small> て大梁を望む
緑水揚洪波	緑水は洪波を揚げ
曠野莽茫茫	曠野は莽 <small>くさ</small> 茫 <small>ぼう</small> 茫 <small>ぼう</small> たり
走獸交橫馳	走獸は交も横 <small>ほし</small> に馳せ
飛鳥相隨翔	飛鳥は相隨 <small>あひま</small> ひて翔ぶ
是時鶉火中	是の時鶉 <small>しゅん</small> 火 <small>か</small> 中し
日月正相望	日月正に相望む
朔風厲嚴寒	朔風は嚴寒を厲 <small>はげ</small> しくし
陰氣下微霜	陰氣は微霜を下す
羈旅無疇匹	羈 <small>きり</small> 旅 <small>よ</small> にして疇 <small>ちゆう</small> 匹 <small>ひつ</small> 無く
俛仰懷哀傷	俛仰して哀傷を懷く
小人計其功	小人は其の功を計り
君子道其常	君子は其の常を道とす
豈惜終憔悴	豈 <small>あ</small> に終 <small>ひ</small> に憔悴するを惜しまんや

詠言著斯章 詠言して斯この章を著す  
 について、何焯は、

嘉平六年二月、司馬師殺李豐、夏侯太初等。三月、廢皇后張氏。九月甲戌、遂廢帝為齊王。乃十九日、是月丙辰朔。十月庚寅、立高貴鄉公。乃初六日、是月乙酉朔。師既定謀、而後白于太后、則正日月相望之時。

嘉平六年二月、司馬師は李豐、夏侯太初らを殺す。三月、皇后張氏を廢す。九月甲戌、遂に帝を廢して齊王と為す。乃ち十九日、是の月の丙辰の朔なり。十月の庚寅、高貴鄉公を立つ。乃ち初六日、是の月の乙酉の朔なり。師は既に謀を定め、而して後に太后に白す。則ち正に日月相望むの時なり。

と解し、嘉平の政変から司馬師による少帝曹芳の廢位に至るまでの五年間、魏の朝廷内部で司馬懿と司馬師によって繰り広げられた数々の暴政を暗示しているとす。阮籍の司馬氏政權への反感は文学作品のみならず、その言動にもあらわれている。「孝」の理念で国を統治しようとする司馬昭に対して、阮籍は母の喪中であるにもかかわらず、司馬昭の面前で酒を飲み、肉を食らい、さらには、父親殺しを容認するかのような発言すらしている。このような言動に対し、至孝として知られる何曾は朝廷において、

明公方以孝治天下。而阮籍以重喪、頭於公坐飲酒食肉。宜流之海外、以正風教。

明公は方に孝を以て天下を治む。而るに阮籍は重喪を以て、<sup>あき</sup>頭らかに公の坐に於て酒を飲み肉を食らふ。宜しく之を海外に流し、以て風教を正すべし。

〔世説新語〕任誕篇

と仇敵の如く弾劾しているし、鍾会も阮籍を罪に陥れようとしつこく彼の身辺を嗅ぎまわっている〔晋書〕阮籍伝)。にもかかわらず、阮籍の司馬昭に対する無礼な言動はまだ収まらない。司馬昭が息子の司馬炎(後の武帝)のために阮籍の娘を嫁に迎えようとしたところ、阮籍は六十日もの間酔い続け、全く受けつけようとしなかつたり〔晋書〕阮籍伝)、さらに司馬昭に自ら願い出て東平太守にしてもらつたにもかかわらず、わずか十日東平に滞在しただけですぐにまた戻ってきてしまつたりなど。〔晋書〕阮籍伝)

魏帝曹髦や嵇康を殺害したことから伺えるように、司馬昭は本来、決して寛大な人物ではない。「詠懐詩」や「鳩賦」などは、当時、まだ司馬昭の目には触れてなかつた可能性が高いので何とも言えないが、阮籍の目に余る無礼な言動の数々は、何時、司馬昭の逆鱗に触れてもおかしくないのである。しかし、何故か司馬昭は阮籍を処罰しようとしなかつた。そればかりか、何曾が阮籍を弾劾した際には、

嗣宗毀頓如此。君不能共憂之、何謂。且有疾而飲酒食肉、固喪礼也。

嗣宗の毀頓すること此の如し。君は共に之を憂ふる

能はずして、何をか謂ふや。且つ疾有りて酒を飲み肉を食らふは、固より喪礼なり。〔世説新語〕任誕篇)と述べ、逆に何曾を叱責している。

また、『世説新語』任誕篇注引『文士伝』にも、

籍放誕有傲世情、不樂仕官。晉文帝(司馬昭)親愛籍、恒与談戲、任其所欲、不迫以職事。

籍は放誕にして世に傲るの情有り、仕官を樂しまず。晉の文帝(司馬昭)は籍を親愛し、恒に与に談戲し、其の欲する所に任せ、迫るに職事を以てせず。

とあるし、嵇康も「与山巨源絶交書」で、

(阮嗣宗)至為礼法之士所繩、疾之如讐、幸頼大將軍(司馬昭)保持之耳。

(阮嗣宗)礼法の士の繩す所と為り、之を疾むこと讐の如くなるに至るも、幸ひに大將軍(司馬昭)の之を保持するに頼るのみ。

と記しており、司馬昭は、こと阮籍に関しては非常に理解ある態度を見せているのである。

司馬昭は何故これほどまで阮籍に対して寛容だったのか、その理由について、松本幸男氏は次のように述べている。

彼が格別に阮籍を庇護しつづけた意図は、その人間的な魅力にひかれたというだけではなく、他にも政治的なおもわくがからんでいたと見なければならぬ。

……司馬昭は淮南の対抗勢力(諸葛誕)をとりのぞく

までは、在野の不平分子にも寛容な態度を見せておきたかったから、とりわけ少壮の人材の信望をつなぎうる、良識派の山濤・阮籍らの起用を考えたものであるう。

松本氏は司馬昭が阮籍に寛大であった理由として、司馬昭が阮籍の人的魅力に惹かれていたことに加え、阮籍を庇護することによって、自らの寛大さを在野の不平分子に示しておきたかったことを指摘されている。この松本氏の考察は説得力をもつものであるが、しかし、それならば、司馬懿や司馬師が行ってきた名士の大量虐殺や、司馬昭の、名士たちの間で絶大なる人気を誇った嵇康殺害をどう説明すればよいのだろうか。司馬氏が執ってきた政策は常に恐怖政治だったではないか。

他の説を挙げると、何啓民氏が『魏志』高貴郷公紀に、

正元元年冬十月甲辰、命有司論廢立（四代皇帝曹芳）之功。封爵、增邑、進位、班賜各有差。

正元元年冬十月甲辰、有司に命じて（四代皇帝曹芳）廢立の功を論ぜしむ。封爵、増邑、進位、班賜は各の差有り。

とあり、阮籍がこの時、関内侯の爵位を賜り昇進していることをふまえ、次のように指摘している。

籍既封爵進位、將謂籍有廢立定策之大功。尋考諸書、同時封関内侯者、唯得鍾会一人、『魏志』卷二十八

「会伝」曰、「高貴郷公即尊位、賜爵関内侯」。是但封爵而未能進位、比籍已自不如。鍾会名公之子、司馬氏之親近左右。裴注称「会歴機密十余年、頗預政謀」。然則籍之預謀明甚。

籍既に爵に封ぜられ位を進めらるるは、將に籍に廢立定策の大功有るを謂はんとするか。諸書を尋考すれば、同時に関内侯に封ぜられしは、唯だ鍾会一人を得るのみ、『魏志』卷二十八「会伝」曰く、「高貴郷公は尊位に即き、爵を関内侯に賜る」と。是れ但だ封爵にして未だ位を進むる能はず、籍に比して已に自ら如かず。鍾会は名公の子にして、司馬氏の親近左右なり。裴注に称す「会は機密を歴ること十余年、頗る政謀に預かる」と。然らば則ち籍の謀に預ることの明らかなること甚だし。

これは、阮籍が司馬氏政権内部にあつて鍾会と同じく謀報活動に深く関与していたとする非常に興味深い指摘である。もし仮にそうだとしたら、阮籍の狂態もその活動を全うするための一種の擬態として位置づけることができ、それなら、司馬昭が阮籍に対して寛容なのも領ける。しかし、よく考えてみるに、何曾や鍾会は同志であるはずの阮籍をつけ狙ったりする必要などあるのだろうか。また、そのような活動に参与する阮籍をいったい高潔無比の嵇康が師と仰いだりするだろうか。

私は政権内部に司馬昭と阮籍の仲をとりもつような人物がいたのではないかと考えた。史書等を通じて

阮籍の交友関係を調べてゆくと、その仲介役にふさわしい人物が一人存在する。それは、阮籍・司馬昭（阮籍と司馬昭は同年齢）より五才年上の山濤である。山濤について、『世説新語』賢媛篇注引『晉陽秋』は、

濤雅量恢達、度量弘遠。心存事外、而与时俯仰。

濤は雅量恢達にして、度量弘遠、心は事外に存するも、而れども時と与に俯仰す。

と記しており、度量が広く、心は世俗の外にありながらも、時勢の流れにも上手に乗ることの出来る人物だったようである。そして、七十九歳にして西晉の司徒の位まで昇っている。以下その山濤について、より詳しく見てゆくことにしよう。

## 二

『世説新語』賢媛篇に次のようにある。

山公与嵇・阮、一面契若金蘭。山妻韓氏、覚公与人異於常交、問公。公曰、我当年可以為友者、唯此二生耳。

山公は嵇・阮と、一面にして契りは金蘭の若し。山の妻韓氏は、公と二人の常の交はりに異なるを覚え、公に問ふ。公曰く、我の当年以て友と為す可き者は、唯だ此の二生なるのみ、と。

ここには「契若金蘭」とあるが、『世説新語』賢媛篇注引『晉陽秋』も、阮籍・嵇康・山濤三人の交

遊は「忘言之契」であつたとしており、きわめて親密な関係にあつたことが伺える。山濤は嵇康を評して、

嵇叔夜之為人也、巖巖若孤松之獨立。其醉也、傀

俄若玉山之將崩。

嵇叔夜の人と為りや、巖巖として孤松の独り立つが若し。其の酔ふや、傀俄として玉山の將に崩れんとするが若し。〔『世説新語』容止篇〕

と言っているが、嵇康の外観のみならず、人間的内面までをも鋭くついたこの人物批評は、嵇康への深い理解があつたからこそ、言い得たのではないだろうか。

山濤は、このように阮籍、嵇康と親密な関係を結ぶ一方で、司馬氏とも極めて親密な間柄にあつた。『晉書』后妃列伝には次のようにある。

宣穆張皇后、諱春華、河内・平皋人也。父汪、魏粟邑令。母河内山氏。司徒濤之從祖姑也。后少有德行、知識過人。生景帝、文帝、平原王幹、南陽公主。

宣穆張皇后、諱春華は、河内・平皋の人なり。父は汪、魏の粟邑の令なり。母は河内の山氏。司徒濤の從祖姑なり。后は少くして德行有り、知識は人に過ぐ。景帝、文帝、平原王幹、南陽公主を生む。

このことから山濤は、宣帝（司馬懿）の妻であり、景帝（司馬師）、文帝（司馬昭）を生んだ張春華と從兄弟（一説に二從兄弟）の関係にあることが分かる。しかも、司馬氏、山氏、張氏はいずれも河内郡を本籍とする名望で

あり、あるいは、家族ぐるみの交りをしていた可能性もある。実際、山濤は司馬懿と若い頃から面識があつた。『世説新語』政事篇注引虞預『晉書』には次のようい  
う。

濤蚤孤而貧、少有器量、宿士猶不慢之。年十七、宗人謂宣帝曰、濤当与景・文共綱紀天下者也。帝戲曰、卿小族、那得此快人邪。

濤は蚤に孤にして貧、少くして器量有り、宿士すら猶ほ之を慢らず。年十七なるとき、宗人 宣帝に謂ひて曰く、濤は当に景・文と、共に天下を綱紀すべき者なり、と。帝戯れて曰く、卿が小族、那ぞ此の快人を得んや、と。

その後、どういふわけか山濤は四十歳になるまで官職にはつかなかつたが、官に就くや、わずか三年で辞職してゐる。政界内部の不穏な動きを察知したからである。このことについて、『晉書』山濤伝は次のように伝えている。

濤年四十、始為郡主簿、功曹、上計掾。举孝廉、州辟部河南(内)従事。与石鑿共宿、濤夜起蹴鑿曰、今為何等时而眠邪。知太傅臥何意。鑿曰、宰相三不朝、与尺一令帰第。卿何慮也。濤曰、咄！石生無事馬蹄間邪。投傳而去。未二年、果有曹爽之事、遂隱身不交世務。

濤年四十にして、始めて郡主簿、功曹、上計掾と為る。孝廉に挙げられ、州辟して河南従事に部す。石

鑿と共に宿りしとき、濤夜起きて鑿を蹴りて曰く、今は何等の時と為して眠るや。太傅の臥するは何の意と知るや、と。鑿曰く、宰相は三たび朝せずんば、尺一を与へて第に帰らしむ、卿何をか慮るや、と。濤曰く、咄、石生は馬蹄の間に事無からんや、と。傳を投じて去る。未だ二年ならざるに、果たして曹爽の事有り、遂に身を隠して世務に交はらず。

司馬懿が仮病を使つて、政敵である曹爽一派を油断させ、その隙をついて攻勢に出ようと企んでいたことを、極秘事項であつたにもかかわらず濤は、嘉平の政変が勃発する一年半も前に嗅ぎつけていたのである。

司馬懿、司馬師と近い関係にあつた人物として『晉書』には、他に司馬懿の弟、司馬孚、司馬師の妻・羊夫人の弟の羊祜等がいるが、司馬孚は尚書令の職から一步身を引き、羊祜も曹爽の招聘を辞している。このことから、山濤も司馬氏の親族の一員として、病床にある司馬懿について何らかの情報を受け取つていたとは考えられないだろうか。

ところで、『晉書』は司馬懿の妻、張夫人について次のように伝えている。

其後柏夫人有寵、后罕得進見。帝嘗臥疾、后往省病。帝曰「老物可憎、何煩出也」。后慚恚不食、将自殺、諸子亦不食。帝驚而致謝、后乃止。帝退而謂人曰、「老物不足惜。慮困我好兒耳。」

其の後、柏夫人寵有り、后罕に進見するを得たり。

帝嘗て疾やまひに臥し、后 往きて病を省みる。帝曰く、老物は憎む可し、何ぞ煩しきりに出づるや、と。后 慚ざん悲いして食はず、将に自らを殺さんとすれば、諸子も亦た食はず。帝 驚きて謝を致し、后 乃ち止む。帝 退きて人に謂ひて曰く、「老物は惜しむに足らず。我が好児を困なやますを慮りのみ」と。  
 (『晉書』后妃列伝)

これは、司馬師、司馬昭兄弟の母親への思いの深さを物語る美談であるが、山濤は彼らの母親の親族ということもあり、この兄弟にとつてある意味で、特別な存在であったようである。それは、嘉平の政変の三年後、それまで身を潜めていた山濤が司馬師のもとに出仕することを告げた際、司馬師は「呂望欲仕邪」(呂望 仕へんと欲するか) (『晉書』山濤伝) と、山濤を太公望呂尚に、自らを周の文王に、亡き父司馬懿を呂尚を望むこと久しかった文王の父太公になぞらえていることから伺える。その後、山濤は驃騎將軍王昶の従事申郎、趙国の相、尚書吏部郎と、出世街道をのぼってゆく。司馬師(景帝)が亡くなり、後を継いだ弟の司馬昭(文帝)の代になつてからは、山濤は司馬昭政権の中樞を担うまでになつている。『晉書』山濤伝によると、

遷大將軍従事申郎。鍾会作乱於蜀、而文帝將西征。時魏氏諸王公並在鄴。帝謂濤曰、西偏吾自了之。後事深以委卿。以本官行軍司馬、給親兵五百人、鎮鄴。大將軍の従事中郎に遷る。鍾会 乱を蜀に作おこし、而して文帝 將に西征せんとす。時に魏氏の諸王公 並び

に鄴に在り。帝 濤に謂ひて曰く、西は偏ひとへに吾れ自ら之を了さめん。後事は深く以て卿に委ゆたぬ、と。本官を以て行軍司馬とし、親兵五百人を給し、鄴を鎮まもらしむ。

すなわち、鍾会が蜀で反乱を起こした際、司馬昭みずからが鎮圧に赴き、その際、手薄になつてしまふ鄴都の守りを全面的に山濤に託し、極めて権限が重い行軍司馬に任じて親兵五百人を与えたというのである。さらに、司馬昭の山濤への信頼を示すものとして、同じ山濤伝に次のような記述がある。

(文) 帝以齊王攸繼景帝後、素又重攸。嘗問裴秀曰、大將軍開建未遂。吾但承奉後事耳。故立攸、將歸功於兄。何如。秀以為不可、又以問濤。濤對曰、廢長立少、違礼不祥。国之安危、恒必由之。太子位於是乃定。太子親拜謝濤。

(文) 帝 齊王攸の景帝の後を繼ぐを以て、素より又た攸を重んず。嘗て裴秀に問うて曰く「大將軍の開建は未だ遂げられず。吾 但だ後事を承奉するのみ。故に攸を立て、將に功を兄に歸せんとす。何如ん」と。秀 以て不可と為せば、又た以て濤に問ふ。濤 對へて曰く「長を廢し少を立てるは、礼に違たがひて祥よからず。国之安危は、恒に必ず之に由よる」と。太子の位 是に於て乃ち定まる。太子 親みづから拜して濤に謝す。

司馬昭はもともと兄司馬師の養子になつていた次男の司馬攸を非常に可愛がり、後継者にする意向であつた



が、山濤にたずねたところ、「長を廢し少を立つるは、礼に違ひて祥よからず。国の安危は、恒に必ず之に由る」と反対したため、長男の司馬炎を跡継ぎに決めたというのである。「太子（司馬炎）親ら拜して濤に謝す」とあるのは、山濤の意見が司馬昭にいかにも重く受け止められたかを物語っている。この二つのエピソードは阮籍の死後間もなくのものであるが、司馬氏一族の命運をも左右する重要な局面において果たした役割を考えると、山濤は司馬昭から最も信頼のおける人物として評価されていたと言える。

以上のことから、山濤は司馬昭と嵇康・阮籍の仲介役を十分に担い得る人物であると見なすことができよう。

嵇康が呂安の事件に巻きこまれて処刑される前年、尚書吏部郎の職に就いた山濤は、自らその職を退き、その後釜に嵇康を推薦している。その意図は、司馬昭の嵇康への疑念を払拭することにあつた。嵇康を救うためには、もはや、司馬昭政権に参加させる以外に道はないと判断したのである。山濤はかつて阮籍とともに「忘言の契り」「金蘭の契り」を結んだ嵇康のことを決して忘れてはいなかったし、彼の身に迫り来る危険をただ漫然と眺めているわけにはいかなかったのである。しかしながら、嵇康は「与山巨源絶交書」〔『文選』卷四十三〕を著し、役人生活に向かない自分が、

もし出仕を強制されれば「必ず其の狂疾を發せん。重怨に非ざる自よりは、此に至らざるなり」と述べ、断固拒否する。そればかりか、『莊子』秋水篇の説話をふまえ、

不可自見好章甫、強越人以文冕也、自以嗜臭腐、養鴛雛死鼠也。

自ら章甫を好むを見て、越人に強ふるに文冕を以てし、自ら臭腐を嗜むを以て、鴛雛を養ふに死鼠を以てす可からざるなり。

と、自分が腐った肉が好きだからといって、鳳凰を養うのに死んだ鼠を食べさせるようなことはすべきではない、と述べ、痛烈に山濤を非難してしまうのである。その結果、彼は山濤という後ろ盾を失ってしまった。その後間もなく、司馬昭と鍾会が仕掛けた罠にはまり、いわれなき罪を着せられて捉えられ、処刑されてしまった。

一方、阮籍についてはどうだったか。山濤が嵇康の危機に対して手をさしのべたことを考えると、彼が阮籍の危険を見過ぐすとは思えない。阮籍を擁護したことを直接示す資料は見られないが、『晉書』阮籍伝に次のようにある。

裴楷往弔之。籍散髮箕踞、醉而直視。楷弔嘑畢便去。或問楷。凡弔者、主哭、客乃為礼。籍既不哭、君何為哭。楷曰、阮籍既方外之士。故不崇礼典。我俗中之士。故以軌儀自居。時人歎為兩得。

裴楷は往きて之を弔す。籍は髪を散じて箕踞し、酔ひて直視す。楷 弔ひ畢りて便ち去る。或ひと楷に問ふ。凡そ弔は、主哭せば、客乃ち礼を為す。籍は既に哭さざるに、君 何為れぞ哭する、と。楷曰く、阮籍は既に方外の士なり。故に礼典を崇ばず。我は俗中の士なり。故に軌儀を以て自ら居る、と。時人歎じて両つながら得たりと為す。

ここで裴楷は、礼に従わず、周囲から冷ややかな視線を浴びる阮籍を「彼は世俗を超越した人だから許されるのだ」と庇い、世論から守ろうとしているのである。このとき、山濤は趙国の長官として赴任しており、都には不在だったと思われるが、この話の裏には山濤の影が見え隠れしているようである。

阮籍を「方外の士」と評した裴楷は『世説新語』政事篇によると、和嶠、王濟ら貴族の子弟とともに、山濤のことを崇拜していた人物であることが分かる。また、『晋書』にも彼の従兄である裴秀とともに山濤との関係がたびたび取り沙汰されており、山濤とかなり親密な関係にあったことが伺える。また、『世説新語』賞誉篇には、阮籍の母親が亡くなる以前のことと思われるが、山濤のことを「如登山臨下、幽然深遠」（山に登りて下を臨むが如く、幽然として深遠なり）と絶賛しており、阮籍のことを「方外の士」と評した頃には、すでに山濤とはそれなりのつながりが出来上がっていたのではないだろうか。

ところで、興味深いのは、山濤と鍾会、裴楷の関係である。『晋書』山濤伝に、

（山濤）与鍾会、裴秀並申款昵。

（山濤）は鍾会、裴秀（楷の従兄）と、並びに款昵を申ぬ。

とあり、同裴楷伝には、

鍾会薦之（裴楷）於文帝、辟相国掾、遷尚書郎。

鍾会は之（裴楷）を文帝に薦め、相国の掾に辟され、尚書郎に遷る。

さらに、

文帝問其人（裴楷）於鍾会。会曰、裴楷清通、王戎簡要、皆其選也。於是楷為吏部郎。

文帝 其の人（裴楷）を鍾会に問ふ。会曰く、裴楷は清通、王戎は簡要、皆な其の選なり、と。是に於て楷を以て吏部郎と為す。

とある。こうなると、山濤・裴楷は阮籍を陥れようとしていたとされる鍾会とも親密な間柄であったということになる。『晋書』阮籍伝には、

鍾会数以時事問之、欲因其可否而致之罪、皆以酣醉獲免。

鍾会は数ば時事を以て之に問ひ、其の可否に因りて之を罪に致さんと欲するも、皆な酣醉を以て免かるるを獲たり。

とあり、これは阮籍が「酣醉」をもって鍾会の厳しい追求から免れたということになってはいるが、山濤が

裴楷を通じて鍾会の追求に歯止めをかけていたというふうにも考えられるのである。

山濤が司馬氏政権で重要な任務を担うようになるのは、司馬昭の代であるし、このように見てゆくと、阮籍が司馬昭の代になって天下御免の放達ぶりを發揮できたのは、無論、阮籍の人間の魅力に負うところもあるであろうが、他の要因として、山濤という、官と隠いずれにも理解ある強力な後ろ楯がいたことも関係しているのではないかと思えるのである。

(注)

- ① 『中国文学発展史』(上) (一九九三年、三聯書店、二六四頁)
- ② 拙稿「阮籍『詠懐詩』成立に関する一考察—晉代における『詠懐詩』受容について」(岡村貞雄博士古稀記念『中国学論集』一九九九年、白帝社)
- ③ 松本幸男『阮籍の生涯と詠懐詩』(一九七七年、木耳社、八五頁)
- ④ 何啓民『竹林七賢研究』(一九八四年、台湾学生書局、三二二頁)
- ⑤ 嵇康「与山巨源絶交書」(『文選』四十三)に「阮嗣宗、口不論人過。吾每師之、而未能力及。至性過人、与物無傷。(以下略)」(阮嗣宗、口に人の過ちを論ぜず。吾毎に之を師とするも、未だ及ぶ能はず。至性人に過ぎ、物と傷つること無し

(以下略)とある。

- ⑥ 福原啓郎『西晉の武帝 司馬炎』(一九九五年、白帝社、一五頁)
- ⑦ 『晉書』景帝紀は、「宣帝之將誅曹爽、深謀秘策、独与帝潜画。文帝弗之知也」(宣帝の將に曹爽を誅せんとするに、深く秘策を謀り、独り帝と潜画す。文帝は之を知らざるなり)と、これは司馬懿と長男の司馬師の間だけで極秘に練られた陰謀であり、次男の司馬昭ですら知らなかったと伝えている。
- ⑧ 司馬懿が床に伏せたのは正始八年(二四七)五月のことであり、嘉平の政変が勃発したのは嘉平元年(二四九)正月のことである。「未二年、果有曹爽之事」(未だ二年ならずして、果たして曹爽の事有り)の記述から、山濤は司馬懿が床に着いた当初から、その目的を知っていたことになる。
- ⑨ ただし、山濤が七十歳を過ぎてからのことであるから、阮籍が死んで十年以上経ってはいいる。
- ⑩ 『世説新語』賞誉篇の逸話は、夏侯玄が存命中(209—254)の頃のものとして伝えられる。